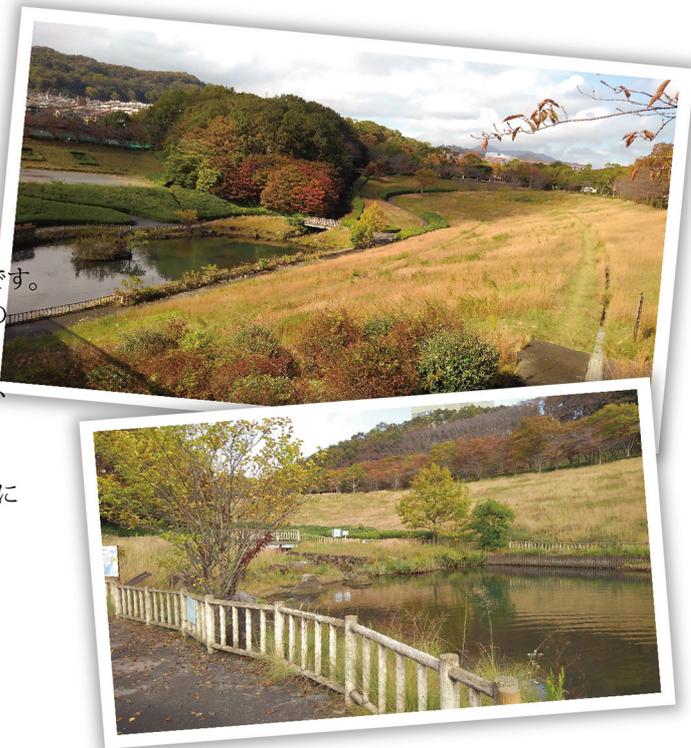


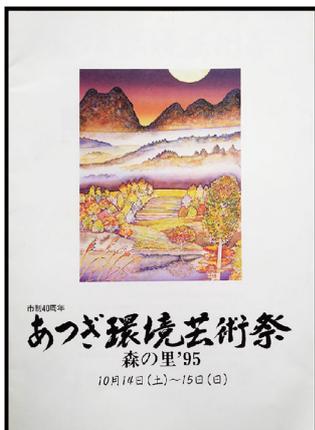
「市民芸術祭」 と 「第九」

今まさに、秋から冬へとその装いを変えようとしているこの場所は、厚木市西部森の里地区にある若宮公園です。春には、この池の上をたくさんの鯉のぼりが泳ぎ、夏祭りの夜には打ち上げ花火、そして間も無く12月に入ると町民手作りのイルミネーションが夕闇の中に浮かび上がり、仕事帰りの冷え切った心と体を温めてくれます。

この池の上に造られたステージで、今から20年余りに厚木交響楽団と市民合唱団によるベートーヴェンの「第九」交響曲第4楽章が演奏されました。1995年(平成7年)10月15日のことです。友の会会員の皆様の中にももしかしたら「覚えている、聴きに来た。」とおっしゃる方がいるかもしれません。

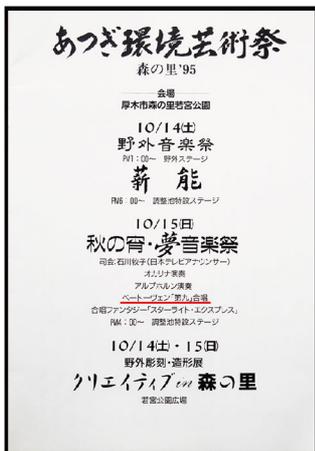


(11月5日 撮影)



市政40周年を記念して「あつぎ環境芸術祭」と銘打ったこの行事では、2日間に渡り若宮公園を会場に、ご覧のように(下段のプログラム参照)多彩なイベントが繰り広げられました。環境芸術祭自体は、昭和63年から平成11年までの12年間森の里若宮公園と近隣の上古沢緑地において開催されていますが、「第九」の演奏が行われたのは平成7年の一度きりです。現在の厚響団員でこれを体験した人はもう半分もいないのではと思われますが、それだけに二度と無い稀有な経験となりました。

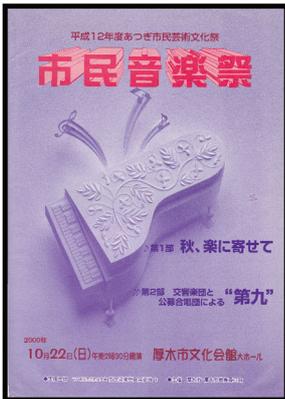
心地よい秋の夕暮れ、公園の土手の斜面に座ってクラシックの生演奏を楽しむ・・・何やら欧米の音楽祭のようでもあります。実際に演奏する側からするとなかなか過酷な体験となりました。この通信のコラムでもお馴染みの「インペクにしお」氏は次のように回想しています。「さすがに森の里は難しいかと思いました。池の上に特設ステージを作ったのもものすごい湿気で・・・楽器の表面が結露して曇ってしまっていて酷いものでした。楽器を複数持つ人はメインに使っていない楽器を持ち込んだりしてましたね。もちろん音は飛ばないので集音マイクを設置して・・・懐かしいけど二度とごめんって当時思いました(笑)」詳しい事情は定かではありませんが、そのようなこともあり、「第九」の演奏はこの年限りとなったのかもしれない。



この日、「第九」の直後には、同じステージで市内の児童合唱団の子供達を中心とした手作りの合唱ファンタジー「スターライト・エクスプレス」が上演されています。このようなオリジナルミュージカル制作の流れは立派に今に引き継がれていて、年末の「市民芸術祭」として私たち交響楽団と1年交代で公演を行っています。



(※年度の後の氏名は指揮者)



平成 12 年：藤田 由之氏

その後、市民合唱団と厚響による「市民芸術祭」(この頃は「市民音楽祭」と呼ばれていた)は厚木市文化会館に会場を移し、平成12年には同じく「第九」の第4楽章、平成14年には「コーラスとアリアの夕べ」の公演を行っています。「第九」全楽章を演奏するようになったのは、平成17年9月厚木市政50周年を記念しての「市民音楽祭」が最初です。その前の年にみなとみらいホールでの厚響特別演奏会(マーラーの交響曲第2番)を成功に導いた遠藤浩史氏を指揮者にお迎えして、前半にはバッハの「管弦楽組曲第2番より アリア」を演奏いたしました。これは4年前の同じ日に起ったニューヨークテロ事件(9.11)の被害者を追悼するためのものでした。



平成 14 年：藤田 由之氏

それから3年後、平成20年から名称が「市民芸術祭」とされ、ミュージカルと交代で1年おきに12月に公演を行うという現在の形が定着しました。プログラムは「第九」ばかりでなくヘンデルの「メサイア」やモーツァルトの「レクイエム」を演奏した年もあります。決して、「市民芸術祭」＝「年末の第九」ではないのです。今後、また新たな曲が登場することもあるかもしれません。

「市民芸術祭」のときは日頃から活動している厚木合唱連盟に所属する皆さんだけでは足りず、公募によって集まった市民の方々を加わって毎回特別編成の合唱団が組織されます。厚木合唱連盟の皆さんとは、「市民音楽祭」以前の1980年代から市主催の様々な記念行事や文化祭で共演を重ねてきています。こちらの定期演奏会(ホルスト「惑星」)や先のみなとみらいホールでの演奏会にもご協力いただきました。



平成 17 年：遠藤 浩史氏

厚響の自主公演としては、1987年(昭和62年)の第18回定期演奏会で「第九」がプログラムとして取り上げられていますが、合唱団とソリスト4人を必要とするため、普通の定期演奏会

ではなかなか実現させるには難しいところがあります。そういう意味でも、隔年の「市民芸術祭」に参加できることは厚響にとってはありがたいことなのです。同じ市内で音楽を愛好する合唱団の方々と共に、アンコールでは客席にいらっしゃる多くの市民の皆さんにも歌で参加していただく。会場内が同じ曲で一つになれるという素晴らしい経験ができる機会なのです。



文化会館開館 30 周年記念 平成 20 年度「市民芸術祭」



平成 20 年：清水 宏之氏



平成 22 年：大浦 智弘氏



平成 24 年：大浦 智弘氏



平成 26 年：大浦 智弘氏



平成 28 年：松村 秀明氏

今年の「市民芸術祭」は文化会館開館40周年記念ともタイアップして、6年ぶりに歓喜の歌がホールに響き渡ります。マエストロ柴田の指揮の元、会場内のすべての人々とこの名曲の素晴らしさを分かち合いたいと願っております。どうぞ皆様、12月16日は厚木市文化会館へお出かけくださいませ。

インペク【にしお】
の
つぶやき



第6回



特別拡大版で 今回は
「第九」特集！

「版」について

近年、様々なクラシック作品で改訂版とか新全集版、Uni-Text版といったものが多く出版されています。これは、20世紀末東西ドイツの統合や旧ソ連の崩壊といった冷戦の終結に伴い、行方不明になっていた資料が発見され、さまざまな研究者により作品の素性が明らかにされてきたことが要因に挙げられます。

特にベートーヴェンの作品に関しては

- ・自身の自筆譜が大変読みづらい（悪筆であったとか）
- ・作曲家自身が聴覚を失っていたため、本人の意思がどこまで当時出版されていた楽譜に再現されていたか疑問
- ・作曲当時としては斬新な作風である
- ・当時の楽器の性能上の制約よりのちの演奏者がアレンジを加えることが慣例化していた

等々の理由により、曲本来の姿はいかなるものであったか演奏家や研究者にとっては大変興味深いことだったので。

「第九」に関しては残っているだけで20点もの原典資料が、ヨーロッパやアメリカの各地に散らばっていて、その大部分がベルリンにあるという自筆スコアでさえも数ページがパリの国立図書館やボンのベートーヴェン研究所にあるなど、今も分散したままです。1996年、イギリスの音楽学者・指揮者のジョナサン・デルマーがこうした新旧様々な資料に照らし合わせて問題点を究明し、それが楽譜化されベーレンライター社より出版されたものが、今回私たちが演奏する“ベーレンライター版”というものです。自筆スコアから誤って伝えられてきた音が元通りに直されたため、ショッピングに聴こえる箇所がいくつもあって出版当時は大いに話題を呼び、わざわざ「ベーレンライター版」による演奏」とうたったCDや演奏会があったほどです。ベートーヴェンの書きたかった、表現したかった音楽を追求した結果、今までのどの譜面や資料にも無かった音形（リズムやフレーズ）が数多く表されている点もこの版の特長です。

さて、皆さんには今回の厚響の“ベーレンライター版”「第九」はどのように聴こえますでしょうか？

CDの長さって

私が大学生になりたての頃、CDが市販化され瞬間にオーディオ界を席卷し、LPレコードがこの世から姿を消しました（最近また復活して参りましたが…）。このCDという新しいオーディオメディアは最大収録時間が74分なのですが、どうしてこの長さになったのかご存知でしょうか？

1979年（昭和54年）、当時CDの開発にあっていたフィリップス社とソニー社はディスクの直径を11.5cmとするか12cmとするかで何度も議論を重ねていたそうです。携帯性を重んじたフィリップスの11.5cmでは収録時間最大60分、ソニーの推す12cmでは74分でした。

ソニーの副社長でバリトンの歌手として音楽をたしなむ大賀典雄氏が親交のあったあのカラヤンに相談したところ、カラヤンは「ベートーヴェンの交響曲第九番が一枚に収まった方がいい。」と提言し、CDの規格は12cm=74分に決まったとのこと。これをCDにおける「カラヤン裁定」ともいいます。

ちなみにカラヤンの「第九」の演奏時間は約63～69分。またほとんどの指揮者による演奏時間は60分を超えています。CDの録音時間はカラヤンの「神の一声」だったのですが、そのおかげで今日「第九」を一枚のCDで聴くことができるわけですね。

厚響／柴田真郁(指揮)の「第九」はいったい何分かな？
CD一枚に収まるのでしょうか！？



年末の「第九」って

1940年（昭和15年）12月31日午後10時30分、紀元2600年記念行事の一環としてヨーゼフ・ローゼンシュトックが新交響楽団（現在のNHK交響楽団）を指揮した「第九」の演奏が、NHKラジオで生放送されました。

これが企画された理由は「ドイツでは習慣として大晦日に第九を演奏し、演奏終了と共に新年を迎える」ということなのですが、実際年末に「第九」を演奏するドイツのオーケストラはライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団をはじめいくつかあるとはいえ、カウントダウンのように深夜に行われるものではなかったとのこと。どこかで話が錯綜した挙句のNHKの企画だったのでしょか？さて、真相はいかに…？

戦後日本で年末に「第九」が頻繁に演奏されるようになりましたが、それには日本交響楽団（前出の新交響楽団から発展し、のちにNHK交響楽団となる）が年末に「第九」を演奏するようになったことが背景にあると言われています。

1940年代後半オーケストラ演奏の収入が少ない時代に、楽団員が年末年始の生活に困る状況を改善するため、合唱団も含めて演奏に参加する楽団員が多く、しかも当時「必ず切符が売れる演奏曲目」であったのが「第九」なのです。それが定例となり、今ではプロアマ問わず、年末は「第九」が定番となりました。



例年、海外からも出稼ぎに？

自由の「第九」

1989年、ベルリンの壁崩壊から約一ヵ月後のクリスマス。レナードバーンスタインがベルリンでベートーベンの「第九交響曲」を演奏しました。長年一つの国を分断し人々を隔ててきた壁の崩壊を祝い、世界5カ国（アメリカ、ソ連、フランス、イギリス、西ドイツ、東ドイツ）の6オーケストラ・3合唱団から編成された大オーケストラが「自由と歓喜」を高らかに歌い上げたのです。

この時、合唱の歌詞が一部変更されていました。通常は「Freude, schöner Götterfunken, Tochter aus Elysium」と歌われる「Freude(歓喜)」が「Freiheit(自由)」になったのです。合唱の第一声が「フロイデ」に代わり「フライハイト！」と高らかに歌い上げられたのです。



撮影：高橋 徹さん（ベルリン在住 音楽家）

指揮者バーンスタインのコメントによると「シラーがこの『歓喜の賛歌』の製作に際して、同じ作品の構想案を『自由に寄す』というタイトルの元に起草していたとの推測が、かつて存在したらしい。その真偽のほどはともかく、スコアに『歓喜』とされた部分を、なお『自由』の語でもって歌い上げる機会を今天が恵み給うたのである。テキストに関するアカデミックな議論をゆるがせにして許されるような歴史的瞬間が存在するとすれば、まさしくいま、それが訪れたのである。ベートーベンもきっと、われわれにたいして同意してくれるに違いない。」当初は「革命の思想」に共鳴したシラーとベートーベンでしたが、フランス革命が徐々に流血の相を呈するようになると、政治革命という〈外なる自由〉から、精神革命という〈内なる自由〉を求めようになり、自由を獲得するためにという理由で殺人を肯定することはできないという立場をとりました。全人類の精神革命を促し、永遠の平和の創出を願う「第九」は、ベルリンの壁崩壊という歴史的イベントを祝うのにまさに相応しい曲だったといえるでしょう。



第82回 定期演奏会

2019年4月21日(日) 14:00 開演

会場／厚木市文化会館 大ホール

指揮／長野 力哉

スメタナ 「売られた花嫁」序曲
「我が祖国」全曲

今後の
演奏会
予定

第83回 定期演奏会

2019年10月6日(日) 14:00 開演

会場／厚木市文化会館 大ホール

指揮／柴田 真郁

モーツァルト 交響曲第35番「ハフナー」
ブルックナー 交響曲第7番

事務局より

●平成7年の「環境芸術祭・森の里第九」には、入団してまだ日の浅かった私も出演いたしました。残念ながら当時の様子がわかる写真も無く、自分の記憶も朧げで、かすかに浮かぶのは池の周囲の土手いっぱいにお客様が座っていらした光景でしょうか。自宅がすぐ近くだったので、ステージ衣装のまま歩いて帰りました。なんだか今思うと、前夜の薪能も含めてあの頃の時代の勢いが感じられ、懐かしい気がいたします。



●前回の友の会通信でもお知らせいたしました。8月25日南毛利公民館にて、毎年恒例の学級講座「生演奏を聴いてみよう」が開催されました。今年の講師は長野力哉先生で、直前に迫った第81回定期演奏会のプログラムから、ワーグナーのオペラ「トリスタンとイゾルデ」「タンホイザー」について、実際のオペラ公演の映像を見ながら解説していただきました。主要なテーマを先生がピアノで提示されるという珍しいシーンもあり、2時間楽しませていただきました。これを受講したことで



興味深まり、演奏会が楽しみになったという嬉しいご感想もいただきました。会場に友の会会員H様の姿もあり、長野先生との握手、ツーショットが実現いたしました！

●今年の「市民芸術祭」は6年ぶりの「第九」ということで、今回はその情報を中心に届けたいと思います。友の会からお送りしたチケットはちゃんと届いておりますでしょうか？お気に入りの席をご用意できず大変申し訳なく思っておりますが、お楽しみいただければ幸いです。当日は第一部にHealing Friendsによる合唱プログラムがあり「第九」は第二部となります。今回は2nd.Violin が外側になる「対向配置」で演奏します。

●平成30年度の会員期間は2019年3月31日までとなっております。今年度の会員さま向けサービスはこの通信を持って最後になります。年が明けましたらまた継続のご案内をお送りいたしますので、ぜひ引き続き「厚木交響楽団友の会」をよろしく願い申し上げます。

(事務局 岡田史子)